

古文 詩歌

折々のうた

古今和歌集

大岡 信



講師

畠山 俊

理解を深めるために

■学習のねらい■

以前の恋人を思い出す気持ちを詠んだ素朴な歌と季節の移り変わりを詠んだ繊細な歌とを読み味わう。さらに、「古今和歌集」とはどのような歌集かを知る。

*

*

*

昔を懐かしむ気持ちを味わう

●月の異名

一月……睦月(むつき)	二月……如月(きさらぎ)
三月……弥生(やよい)	四月……卯月(うづき)
五月……皐月(さつき)	六月……水無月(みなづき)
七月……文月(ふづき/ふみづき)	八月……葉月(はづき)
九月……長月(ながつき)	十月……神無月(かんなづき)
十一月……霜月(しもつき)	十二月……師走(しわす)

●季節

一月、二月、三月……春	四月、五月、六月……夏
七月、八月、九月……秋	十月、十一月、十二月……冬

●注意する語句

花橘……「橘の花」橘の花の美しさをほめていう言い方
 かげば……かげ(ガ行四段已然) + ば(接続助詞順接確定条件) 「かくと」
 ぞ………する ぞ(係助詞) + する(サ行変格連体形 結び) 強調

昔の人は衣装に香をたきしめることがありました。それぞれの香りを競って、アピールしたのです。作者の、以前の恋人は柑橘系の香りを袖にたきしめていました。たまたまかいだ本物の橘の花の香りがそのときの記憶を鮮やかによみがえらせたことを歌に詠んでいます。「よみ人しらず」という作者のわからない歌です。

「古今和歌集」について知る

■「古今和歌集」

最初の勅撰和歌集。

- ・ 九〇五年 醍醐天皇の命が下る。九一三年ごろ天皇に献上。
- ・ 二十卷。千百首。
- ・ 選者 紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑。
- ・ ほとんどが短歌形式。
- ・ 部立 春、夏、秋、冬、恋など。
- ・ 巻頭に仮名序、巻末に真名序。
- ・ 第一期 よみ人しらずの時代
- ・ 第二期 六歌仙(僧正遍照、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大友黒主)の時代。
- ・ 第三期 選者の時代、ほかに伊勢、素性法師など。

歌風 「万葉集」……ますらをぶり。

「古今和歌集」……たをやめぶり(たわやめぶり)。

季節の移り変わりを感じる

●注意する語句

来ぬ………来(カ行変格連用) + ぬ(完了の助動詞終止)「やって来た」

さやかに………(形容動詞連用)「はつきりと」

見えねども……見え(ヤ行下二段「見ゆ」未然) + ね(打消の助動詞已然) +

ども(接続助詞逆接)

「見えないけれども」

ぞーぬる………ぞ(係助詞) + ぬる(完了の助動詞連体 結び) 強調

おどろかれぬる…おどろか(カ行四段未然) + れ(自発の助動詞「る」連用)

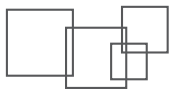
+ ぬる(完了の助動詞連体)

「自然ときづかされたことよ」

●古今異義語

おどろく………現代語の「びっくりする」以外に「きづく、目が覚める」の意

味があります。



■古今和歌集

五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

よみ人しらす

【卷三 夏歌】

現代語訳

夏の五月を待つて咲く橘の花の香りをかぐと、昔の恋人の袖の香り（と同じ香り）がすること（でその人のことを思い出すこと）よ。

ふぢはらのとしゆき
藤原敏行

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる

【卷四 秋歌上】

現代語訳

秋がやってきたと目にははつきりと見えないけれども、（吹いてきた）風の音に（秋が来たこと）自然と気づかされたことよ。